



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



## 英語の代名詞化についての若干の考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東, 毅 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/710">http://hdl.handle.net/10258/710</a>

# 英語の代名詞化についての若干の考察

東 毅

## Some Observations on Pronominalization in English

Takeshi Higashi

### Abstract

In this paper, I have tried to find out what seems to exert some influence on the coreference of 2 NP's in a single sentence. Sentences including 2 NP's free from the relation of c-command were used as materials of this study. I took up nouns as 'topic' or nouns with 'topicality' as one factor relating to coreference of 2 NP's. But I think this is only one of the factors which seem to have some relation to coreference of 2 NP's. This problem shows very complicated aspects when it is investigated in detail. Therefore, we will have to investigate this problem pragmatically as well, not to mention a syntactic and semantic investigation.

### I. はじめに

代名詞が指示するものに関する解釈の問題は、単一文レベルの問題というよりはむしろ複数の文から成る文脈や現実の言語使用場面などにかかわる問題であるということができ、これを単一文のレベルで統語的観点から把らえんとするところに問題の生じる余地があるということができよう。即ち、統語的観点からだけでは十分明解に解釈できない文が生ずる訳であるが、これは、ある単一の文がその言語の母国語使用者によって正しいと判断されるのは単に統語的観点からのみではなく、その文が何等かの文脈、状況の中に組み込まれた際にその文脈や状況を完成するに足るものだと判断されるという

ことと関係するであろう。そして、このような文脈、状況を補完して完成させる単一文は、それだけを取りあげても文脈からはずしたために生ずるあい味さはあるものの、それなりの意味、脈絡を持つものと言える。

こうした単一文を対象にした場合、名詞と代名詞の同一指示の問題は殊更に語用論的な色彩の強いものだけに、統語上の説明だけでは十分だとは感じられない場合がある。本稿では、C統御を中心とした統語上の規則を単一文に適用して、それによって同一指示のあるなしが説明されたとする文のうち、C統御の関係が成り立たず同一指示関係は自由であると判断される例を取りあげ語用論的見地から検討を加え、C統御以外に同一指示に作用すると思われるものの有無を探ったり。

## II. C統御と照応関係

ここではReinhart (1983) に従って名詞と代名詞の照応とC統御の関係を概観する。Reinhart によるC統御の定義は次のようなものである。

- (1) Node A c(onstituent)-commands node B iff the branching node  $\alpha_1$  most immediately dominating A either dominates B or is immediately dominated by a node  $\alpha_2$  which dominated B, and  $\alpha_1$  is of the same category as  $\alpha_2$ .

この定義の述べていることを例によって示してみる。

- (2) Lola found the book in the library.  
 (NP<sub>1</sub>)            (NP<sub>2</sub>)            (NP<sub>3</sub>)

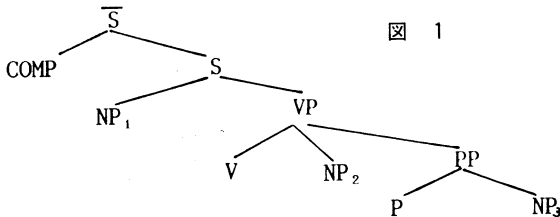


図 1

NP<sub>1</sub>, NP<sub>2</sub>, NP<sub>3</sub> の間には、この定義によると、NP<sub>1</sub> が NP<sub>2</sub>, NP<sub>3</sub> を C 統御し、又、NP<sub>2</sub> は NP<sub>3</sub> を C 統御する

という関係があるということになる。このC統御にもとずき、次のような同一指示の条件が設定される。

- (3) A given NP must be interpreted as non-coreferential with

any distinct non-pronoun in its c-command domain.

この条件により次のような例の同一指示関係が説明可能となる。

(4) a \*Near Dan, he saw a snake.

b \*Near Dan, Dan saw a snake.

c Near him, Dan saw a snake.

(4) a, bでは、P Pに支配されているDan(NP<sub>3</sub>)は、前置されてCOMPに付加されていても主語のhe, Dan (NP<sub>1</sub>) のC 統語領域にあるため、上の条件(3)により同一指示とは言えない。しかし、cでは、P Pに支配されているhim (NP<sub>3</sub>) は非代名詞ではなく代名詞であるためこの条件によって主語のDan (NP<sub>1</sub>) と同一指示となることを妨げられない。従って、himとDan は同一指示と解釈することが可能である。

(5) a \*He was fired since McIntosh's weird habits had finally reached an intolerable stage.

b \*McIntosh was fired since McIntosh's weird habits had finally reached an intolerable stage.

c We had to fire him since McIntosh's weird habits had reached an intolerable stage.

(5) cでは、McIntosh (NP<sub>3</sub>) はhim (NP<sub>2</sub>) のC 統御領域の中に入らない。これは、since に導かれた節はSによって支配されており、V Pによって支配されていないからである。従って、himとMcIntoshとは条件(3)によって同一指示となることを妨げられない。しかし、a, bではsince 節は主語のC 統御領域に入るため、それぞれ下線のNPは同一指示とはならない。これら(5)の例では、NPが主語であるか目的語であるかにより、同一指示が成り立つかどうかが決まることになる。

(6) a \*She found a scratch in Ben's picture of Rosa.

b \*In Ben's picture of Rosa, she found a scratch.

c \*I'm willing to give him 2 grand for Ben's car,

d For Ben's car, I'm willing to give him 2 grand.

e \*She is riding a horse in Ben's picture of Rosa.

f In Ben's picture of Rosa, she is riding a horse.

(6) a では、PPはVPに支配されており、主語 she のC統御領域内にある。PPが前置されてもこの関係は変わらない。従って、a, bともにそれぞれのNPは同一指示とはならない。CではPPはVPに支配されておりhimとBenとは同一指示とならないが、dではPPはCOMPに移りそのためhimにC統御されない。そのため、Benとhimは同一指示が可能となる。eでは、PPはSによって支配されている。従って、PPに支配されるRosaは主語 she のC統御領域に入り、そのため同一指示とはならない。fではPPは前置されているが、この場合は、PPはCOMPではなくEに付加し主語 she によってC統御されない。従って、Rosaとsheは同一指示が可能になる。

以上では、definite NP's における照応関係の概略を述べたが、nonspecificでnongenericな意味のindefinite NP'sであるQuantified NP'sについても、やはりC統御の関係が照応関係には作用している。C統御は意味論に関係する諸属性から必ずしもでてきたものではない統語的規則であるが、Quantified NP'sに関する照応関係の場合には先行詞をoperatorとし、代名詞をそれに束縛される束縛変項とする意味論的に規定されたNP'sに、この統語規則であるC統御が作用するのである。ここで、先行詞にはそれ自体が束縛された変項と解釈される *wh*-trace も含め、束縛変項としての代名詞を束縛照応形として、Reinhart は次のような束縛変項規制を設定する。

(7) Quantified NPs and *wh*-traces can have anaphoric relations  
only with pronouns in their c-command syntactic domain.

この規定は、definite NP's の場合とは違って、代名詞がQuantified NP'sの領域中に入らない場合は照応関係は成立しないことを意味する。

(8) a [S [NP Each of the kids] [VP kissed Rosa] [PP in his picture]]].

b \*[S [NP Rosa] [VP kissed each of the kids] [PP in his picture]].

- c [S [NP Rosa] [VP put each of the books [PP in its box]]].

(8) aでは, hisはeach of the kidsのC 統御領域に入っているが, bではin his pictureは文修飾要素でSに直接支配されておりhisはeach of the kidsのC 統御領域に入っていない。cではin its boxはVPに支配されておりitsはeach of the booksのC 統御領域に入る。従って, bだけが同一指示は成り立たないことになる。

- (9) a \* [S [NP The neighbors [PP of each of the pianists]] [VP hate him]].

- b [S [COMP Who] [S [NP t] [VP was arrested] [PP in spite of his alibi]]] ?

- c \* [S [COMP Who] [S [did [NP the police] [VP arrest t] [PP in spite of his alibi]]] ?

(9) aのhimはeach of the pianistsのC 統御領域にはない。bのtはhisをC 統御するが, cのtはhisをC 統御しない。従って, bのみが同一指示と解釈される。

- (10) a \* [S [COMP Near his child's crib] [S [NP nobody] [VP would keep matches]]].

- b \* [S [COMP Near his child's crib] [S [NP you] [VP should give nobody matches]]].

- c [S [NP You] [VP should give nobody matches [PP near his child's crib]]].

(10) a, cではともにhisはnobodyのC 統御領域に入っているが, bでは入っていない。従って, bは同一指示と解釈できない。

次に, 再帰代名詞と相互代名詞 (R-pronouns) であるが, これらは直示的に, 又は, 指示的には用いられず, 文中の先行詞とのみ同一指示となるものである。従って, 束縛変項としての解釈のみが可能である。Reinhartは, これらの代名詞に対する同一指示についての条件を次のように規定している。

- (11) An R-pronoun must be interpreted as anaphoric (or coindexed) with, and only with, a c-commanding NP within a specified syntactic environment, e.g. its minimal governing category.

この条件により、次の例におけるような場合の同一指示関係が説明される。

- (12) a [S [PP To each other], [S [NP the women] [VP introduced the smartest men]]].  
 b \*[S [PP To each other], [S [NP the women] [VP introduced the smartest men]]].  
 c [S [NP The woman] [VP introduced the smartest men [PP to each other]]].
- (13) a [S [COMP Which fancy story [PP about himself]] [S did [NP Felix] [VP tell you this time]]] ?  
 b \*[S [COMP Which fancy story [PP about himself]] [S did [NP you] [VP tell Felix this time]]] ?
- (14) a \*[S [NP Zelda] [VP believes [S that Felix adores herself]]].  
 b [S [NP Felix] [VP promised himself [S that he will be elected]]].

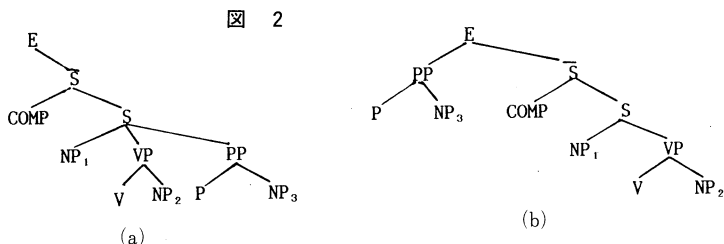
(12) aでは、each otherはthe womenによってC統御されているが、bのthe smartest menはVPに支配されているためeach otherをC統御できない。cのeach otherを含むPPはthe smartest menを直接支配するVPによって支配されているのでthe smartest menにC統御されている。(13) aのFelixは主語であるためhimselfをC統御できるが、bではVPの構成要素であるためC統御できない。(14)では、a、b共に主語はherself、himselfをC統御できそうに見えるが、aのherselfの先行詞はその最小統率範疇 (minimal governing category)<sup>2)</sup>に入っていないのでZeldaとherselfは同一指示とは解釈できないのに対して、bのhimselfはそこに入っているのでFelixと同一指示と解釈できる。

以上の概観により、統語規則であるC統御が名詞と代名詞の間の同一指示関係の有無を説明する手段としてかなり有効であることがわかるであろう。

### Ⅲ. C統御から自由な例の検討

#### 1. PP内のNPと主文のNPの照応関係

次の(15)の例ではPPは文修飾要素であるから、a, bのように文後位においては主語であるNPにC統御されているためaでは同一指示は不可能になるが(図2, a), 文前位置においては(c, b) Eに付着するため名詞と代名詞の間の同一指示関係は自由である(図2, b)。自由というのは、文脈によっては同一指示が成り立つことも成り立たないこともあり得るということである。e, fもPPはEにつくため同一指示の関係は自由である。



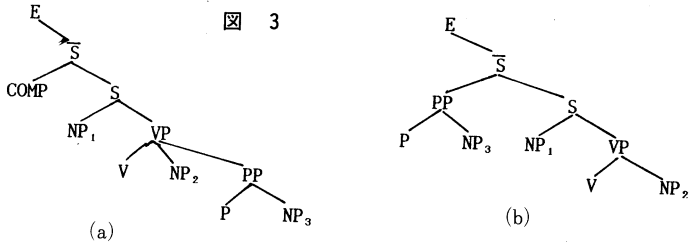
- (15) a \*He is an absolute dictator in Felix's office.  
 b Felix is an absolute dictator in his office.  
 c In Felix's office, he is an absolute dictator.  
 d In his office, Felix is an absolute dictator.  
 e According to Felix, he is a real democrat.  
 f According to him, Felix is a real democrat.

次の(16) a, bではwhen節は主語のNPのC統御領域に入る。従って、aは同一指示は可能だがbは不可能である。when節は文修飾要素であるからc, dではwhen節はEに付加し同一指示は自由である(図2参照)。

- (16) a Rosa will go to London when she finishes school.  
 b \*She will go to London when Rosa finishes school.



- c When Rosa finishes school, she will go to London.  
 d When she finishes school, Rosa will go to London.



- (17) a \*He smoked pot in John's apartment.  
 b \*In John's apartment, he smoked pot.  
 c In John's newly renovated apartment on 5th Avenue, he smoked pot.  
 d \*She speaks about butterflies in Zelda's letter.  
 e ?In Zelda's letter, she speaks about butterflies.  
 f In Zelda's latest letter, she speaks about butterflies.  
 g \*In Ben's next picture for Vogue magazine, he promised Rosa that he would make her look attractive.  
 h \*With Rosa's most magnificent peacock feather, she tickled Dan.  
 i \*In Ben's most precious box, he put his cigar.

(17) a, b では PP は VP に支配されており (図3, a 参照), PP が前置された b, e は PP が COMP に付加している (図3, b 参照)。そのため、条件(3)により同一指示とは解釈できない。c, f の PP も後置されていれば VP に支配されるので、前置された場合 COMP に付加して b, e のように条件(3)により同一指示を許されない筈であるが実際には許される。これは PP が長くなることによって COMP を飛び越えて E に付着したものと解釈される。しかし、PP が長い表現にされても g, h, i のように VP に強く支配されている場合は E につくことはできず COMP に付加する。つまり、g では PP は VP に支配されている that 節の中の構成要素であり、h の PP は道具を意味

していて動詞 tickled と強く結びついている。i の場合も put と場所を示す P P との意味上の結びつきは強い。それ故、P P は主節の主語の C 統御領域にあり、条件(3)により同一指示を許されない。(17 c, f の名詞と代名詞を置き換えて(18 a, b のようにすると、P P は COMP に付加するものと解釈できるであろう。

(18) a In his newly renovated apartment on 5th Avenue, John smoked pot..

b In her latest letter, Zelda speaks about butterflies.

このことから、文の構造上、あるいは、意味上 V P にそれ程強く支配されていない P P は his, her のような代名詞を用いず John's, Zelda's のように名詞を用い P P の構成要素の中の名詞を修飾語によって十分に特定化することによって E に付着させることができることになる。

(17 h, i に対する反例としてあげられた Reinhart (1981) の次のような例はどうであろうか。

(19) a In some of Ben's boxes, he put cigars.

b In which of Ben's boxes did he put cigars?

c In the box that Ben brought from China, he put cigars.

d With which of Rosa's feathers did she tickle Dr. Levin?

e With the feathers that Rosa stole from the Salvation Army, she tickled Dr. Levin.

(19) a, b, c では前置された P P は道具を表していて動詞 put と強く結びついている。(19) d, e の P P も道具を表わし動詞 tickled と強く結びついている。

(19) b, d のように疑問詞を含む P P が付加するのは COMP であるから、他の P P も COMP に付加していると考えられる。主語の代名詞は P P の中の名詞を C 統御していることになるのに同一指示は可能である。これらの例に共通してみられることは名詞は構造上 P P の深い部分に埋め込まれて名詞と代名詞の距離が構造上遠くなっていることである。更にここで注目されるのは、P P の構成要素として Ben や Rosa のような名詞を用いその中の主要語にな

るNPが明確な特定化を受けPPが文修飾の機能を持つように解釈できるようになったことであろう。そして、Ben's boxesやRosa's featherのtopicalityが高くなりPP全体がthemeと理解できるようになったことであろう<sup>3)</sup>。

ここで、PPが文修飾であると解釈できる次のような例に対するMacLeodの説明を見てみよう。

(20) Throughout Breznev's career, he has acted in a blunt and unsubtle way. Newsweek 24.3.80, p.8

(21) Despite Thatcher's diplomatic style, no one, except the French, denied that she has a case. Time 31.3.80, p.12

彼の説明を、例文の番号を本稿にあわせて(20)、(21)とかわえて一部引用する。

A feature of the special journalistic style instanced by (20) and (21) is that naming (of individuals) can be displaced from the main predication as a way concentrating on the topicality of the person being talked about. This is particularly the case when naming is not introductory of a new individual. Neither (20) nor (21) involves a first mention within the articles drawn from either Breznev or Thatcher---obviously:

このように、話題にのぼっている人物のtopicalityに注意を集中させる方法であって、名前を挙げることによってこの場面に初めて人物を登場させるのではないと述べ、更にこの説明のすぐあとで、

...when (20) and (21) can only be sentences about Breznev and Thatcher, in the sense that they contribute to discourses of which Breznev and Thatcher are theses, ..... (p.263)

と述べ、BreznevとThatcherがテーマとなっている文脈においてこれらの人物のtopicalityを高める効果をこの表現は持つことに着目している。即ち、代名詞を用いても差し支えないのにその部分のtopicalityを高めるために敢えて名詞を用いているという説明である。(17) c, f, (19)の各例にもこの説明は妥当するであろう。(17) c, fではapartment, letterを修飾要素で十分に特定

化し、更に、`topicality を高めるために関与する人物の名前を用いてPPの独立性を高め、その結果、文修飾要素としてEに付加させ、文のthemeとしての役割を持たせるようになったとすることができよう。また、(19)ではPPの中の名詞を深く埋め込むことによって主語からの作用からのがれ独立性を高めたとすることができよう。

次のBolingerが挙げた例は、条件(3)に違反する文であるが、これらの文ではPPがthemeとなっている。

(22) a He was just a little boy(,) when I first saw John.

b He's impossible, when Ben gets one of his tantrums.

c He'll be captured the instant that John shows up.

d He usually flunks when John tries to cheat.

(22) a ではwhen節の中のfirstにより、bでは主文の動詞がimperfective verbであるから、cではJohnが現れる場面が設定されたらという意味の上から、dもwhen節で述べられている条件が与えられたらという意味の上から、それぞれの節はthemeとなっていると説明されている。時間節のような動詞との結びつきが強いものでもthemeと解釈されるときはC統御による規制すら受け付けていないのが注目される。

以上のことから、名詞はtopicalityを持ちthemeとしてのPPの中に生じる場合、主文中に生じる代名詞とC統御による条件にもかかわらず同一指示になる傾向のあることが伺えるであろう。

## 2. PPを持たない単一文中的NP'sの照応

NP間にはC統御は成り立たないのであるから同一指示の関係は自由である。ここでは、同一指示が成り立つものとしてその条件を考える。

(23) a Only her naval supremacy saved England.

b The news of their inheritance did not elate the boys.

c His party brings down Ohira.

d Jokes about his wife upset Max.

MacLeodの説明を借りれば、(23) a, b, c, dはそれぞれの述部が古い情報を担うthemeで、主部が新しい情報を伝えるrhemeである。そして、それぞれの文を受動文にするとthemeとrhemeの順は正常になる。

- (24) a England was saved only by her naval supremacy.  
 b The boys were not elated by the news of their inheritance.  
 c Ohira is brought down by his party.  
 d Max was upset by jokes about his wife.

(24)の各文は、England, the boys, Ohira, Maxがher, their, his, hisをC統御しており同一指示は保証される。特に(23) aでは主部にonlyがあることから、この部分に焦点がありrhemeであることが予測される。

次のような文も同様に説明できるものと思われる。

- (25) a Planning their trip to Europe pleased the boys very much.  
 b Frustration by his father of his wish to become a doctor made the young man very unhappy.

(25)の文を受動文にすると(26)のようになりthemeがはっきりしてくる。

- (26) a The boys were very much pleased at planning their trip to Europe.  
 b The young man was made very unhappy by frustration by his father of his wish to become a doctor.

また、(25)の各文は次のような質問に対する答として適当であろう。(25) aは(27) aに対する答に、(25) bは(27) bに対する答になるであろう。即ち、the boys, the young manはthemeの部分にありtopicとなっている。

- (27) a What pleased the boys very much?  
 b What made the young man very happy?

### 3. 関係節内のNPと外のNPの照応

(28) a, bは主部の関係節内のNPと目的語としてのNPの間に照応関係がみられるものである。

- (28) a People who know Nixon hate him.

b People who know him hate Nixon.

(28) a, bを答として引き出すのに適当な質問文として次の(29)のような質問文を考えることができよう。

(29) Who hates Nixon?

この質問に対する答としての(28) a, bはそれぞれの主部がrhemeで述部がthemeであると考えられる。この場合、(28) aでは関係節内のNixonはNixonの人物のようなものを意味していると解釈できよう。一方、(28) bでは(29)の質問文のthemeの部分がそのまま繰り返されNixonがtopicであることを明確にしている。このことから、(28) aのhimは(29)のNixonを受けていると解釈できるのに対し(28) bのhimはこの文のtopicであるNixonを受けているものと解釈できる。このような解釈を受けるものとしての(28)の各文を受動文にすると次のようになる。

(30) a \*He is hated by people who know Nixon.

b Nixon is hated by people who know him.

(30) aは条件(3)によりHeとNixonは同一指示とはならないが、bのhimはNixonのC統御領域内にあり同一指示が成り立つ。しかし、(28) aは(29)に対する答としての文脈とは違った文脈の中で、Nixonをtopicとして含む主部がthemeと解釈できる場合には、同一指示は成り立つであろう。

(31) a, bは主部の関係節内のNPと目的語に対する修飾語としてのNPとの間に照応関係がみられるとされているものである。

(31) a The woman who marries Ben will marry his mother as well.

b The woman who marries him will marry Ben's mother as well.

これらの文にはas wellがあることにより、述部がrhemeでそこに焦点が含まれていると解釈できる。(31) aはすでにBenが導入されている文脈の中でBenと関係する新たな話題を提示し、motherに焦点をあてた文ととることができる。(28) aと同様theme部分にtopicityの高い名詞が表現されたことによりrheme部分にある代名詞と同一指示となることができたと思われる。

一方, (31) b の Ben's mother の Ben は Ben という人物そのものではなく Ben に対する特別な感情とか態度といったような意味合がこめられていると解釈できる。このように解釈したときに(31) b では him と Ben の同一指示が成り立つと思われる。<sup>4)</sup>

次に, MacLeod からの例を検討してみる。

- (32) a The title Joe Clark earned last week is one that he has coveted since his boyhood days.
- b The title he earned last week is one that Joe Clark has coveted since his boyhood days.
- c It looks as if the chap who sold the bottle gave it the usual wipe over before wrapping.
- d It looks as if the chap who sold it gave the bottle the usual wipe over before wrapping.

(32) a, c では theme となっている主部に名詞が用いられ, Joe Clark や the bottle がそこで topic として意味の上で重みを持ち, rheme の部分の焦点は he や it をとりまく部分にあるのに対し, (32) b, d では述部の中の Joe Clark や the bottle が topical な重みを持ち, 描写の中心がこの部分に移ってきている。そして, 述部が theme と解釈できる。

#### 4. 主部の that 節内の NP と外の NP の照応

- (33) a That he had failed was, of course, obvious to the Colonel.
- b \*That the Colonel had failed was, of course, obvious to him.
- c That people hate him disturbs Felix but not Max.
- d That people hate Felix (should) disturb him.
- e That Rosa has failed (should have) bothered her.

that 節の中に代名詞があり述部に名詞がある (33) a, c は同一指示が可能であるが, that 節の中に名詞があり述部に代名詞のある (33) b, d, e のうち b の例

は同一指示が不可能である。Reinhartはthat節の内容が述部のNPの見解 (point of view) を表しているときと解釈できるときはthat節内のNPが代名詞のときだけ述部のNPと同一指示になると述べている。<sup>5)</sup> a, bの例では述部のobviousによりthat節の内容が述部のNPの見解を表していることは明白であり、この説明は妥当する。c, d, eでは動詞の意味からthat節の内容が述部のNPの見解であるとは言えないから二つのNP'sの同一指示は可能となる。次の例はどうであろうか。

(34) a Knowing that he was going to be late bothered John.

b \*Knowing that John was going to win the race bothered him.

これらの例ではthat節内にwas going toが用いられていることにより、述部のNPの一種の見解が表されているものとみることができ、やはり上の説明が妥当する。しかし、次の例はどうであろうか。

(35) a \*Learning that John had cancer bothered him.

b \*The fear that John is imperfect naturally displeases him.

c Knowing that John is perfect naturally pleases him.

d The knowledge that John is perfect naturally pleases him.

Bolingerは(35) a, bの場合 learning やfearは個人の心の中にだけあるものを意味するが、c, dのknowing, knowledgeは他の人とも共有できる知識を意味していることに注目している。即ち、that節を導びく要素によってthat節の内容の性格が決められ、その性格によって同一指示が成り立つかどうかが決められるという。しかし、(34) a, bは(35) c, dのようにthat節の前にknowingがあるにもかかわらず(34) bでは同一指示は不可能である。先に、(34) bのthat節の中にはwas going toがあって一種の見解を意味していると述べたが、(35) c, dのthat節の内容も見解であると見られないこともない。そうすると、両方共、that節の内容は一般に共有された知識であり一種の見解を意味していると言うことができることになる。しかし、(34) bのthat節の内容は共有された知識であるとはいえ、不確かな予測という側面を持っており一時的な性格のものであるのに対し、(35) c, dは見解であるとはいえ状態を表わしており



衆知の事実とみなされているように思われる。これらのことから、that節の内容が述部のNPの個人的、主観的見解と解釈でき一時的で不安定とうけとれる場合はthat節のNPが代名詞のときに同一指示が可能になると言えよう。次の(36)では、主部は非個人的で確定した事実を表しているゆえにthat節内の名詞と述部の代名詞は同一指示が可能になると言えよう。

(36) Deciding that the committee was the beneficiary kept it from losing substantial funds.

#### 5. 主部のNPと述部のNPの照応

(23)の各文の名詞と代名詞を入れ換えると次のような文ができる。

- (37) a Only England's naval supremacy saved her.  
 b The news of the boys' inheritance did not elate them.  
 c Ohira's party brings him down.  
 d Jokes about Max's wife upset him.

(37)の各文では主部の中の名詞を支配しているNP節点は代名詞をC統御してはいるが、名詞自体と代名詞の間にはC統御の関係は成り立たない。しかし、まだ前方照応的に二者は同一指示であると解釈できる可能性は残されている。aを除けば主部をthemeとした読みは可能であり、代名詞はtheme中のtopicalityを持った名詞と同一指示ということになる。aでは主部にonlyがあるため主部とはいえrhemeと解釈せざるをえない。他の例も主部をrhemeと解釈することもできる。そのようにして(37)を(38)のように受動文に転換してみる。

- (38) a \*She was saved only by England's naval supremacy.  
 b \*They were not elated by the news of the boy's inheritance.  
 c \*He is brought down by Ohira's party.  
 d \*He was upset by jokes about Max's wife.

すると、代名詞が名詞をC統御することになり条件(3)によりNP間の同一指示の解釈は成り立たなくなる。しかし、(37)のように名詞を含む部分がrhemeであっても主部であれば、その中の名詞は後方の代名詞と同一指示は可能に

なると思われる。その場合、主部の名詞はやはり topicality を持ったものであって、更に rheme の中で焦点となり、それと同種の別の名詞との対比を表しているように受けとれる (39 f, 9 参照)。23 の例も勘案すれば、theme 部分に topicality を持った名詞がある場合は同一文中の代名詞と同一指示となると言えよう。しかし、topicality をもった名詞が rheme にあってもそれが主部にあるのであれば、独特な意味を表現しはするが同一指示は成り立つと言えよう。

Reinhart の次のような文もこのような観点から説明できよう。

- (39) a The jokes about her boss pleased each of the secretaries.  
 b The jokes about each other amused the neighbours.  
 c Everyone's mother thinks he's a genius.  
 d Nobody's students should respect him.  
 e Felix's mother thinks he's a genius and so does Siegfried's mother.  
 f The friends of Felix respect him, but the friends of Siegfried do not.  
 g Some friends of Felix respect him and so do some friends of Siegfried.

(39) a, b では、それぞれ each of the secretaries, the neighbours が theme で topic となっている。c, d は Quantified NP ではあるが、theme である主部の一部である。e は Sloppy reading が可能、f, g は Sloppy reading<sup>6)</sup> が不可能として挙げられた例であるが、これらの例はまた、e では主部が theme、f, g では主部は rheme の一部と解釈できる。Sloppy reading の可能、不可能ということを別にするると各例の前半部では主部が theme であると rheme であるとを問わずそこに topicality をもつ Felix がある。このように主部の中にある名詞は後方の代名詞と同一指示となっている。しかし、次の (40) a, c はそれぞれ each of the students, Tom は主部の一部ではあるが、同一指示は不可能である。

- (40) a \*The mother of each of the students kissed him.  
 b Tom's mother kissed him.  
 c \*It was Tom's mother who kissed him.  
 d \*Tom's sudden appearance astonished him.  
 e John's mother was disappointed in him.

(40) a は主部が rheme であると解釈できる。また、b の主部は theme と解釈するときは同一指示が可能と思われるが、rheme と解釈されるときは c のように同一指示が不可能になるように思われる。d では主部を theme と解しても rheme と解しても同一指示は不可能のように思われる。e の主部も theme, rheme のいずれの解釈もありうるように思われるが、同一指示であると言えるのは theme と解釈した場合であろう。d を除いたその他の例からは主部が theme と解釈できるときの方が、単に主部の場合と言うよりも同一指示と解釈できる可能性が高いと言えるであろう。しかし、theme であれ rheme であれ主部に topicality のある名詞があれば同一指示が成り立つ場合と、主部に topicality のある名詞があっても theme でなければ同一指示が成り立たない場合の区別の問題は残る。また、d のような例は意味の上からの検討も必要であろうと思われるが、今後の課題としたい。

#### IV. おわりに

C 統御の関係が成り立たず、名詞、代名詞の照応に関しては文脈に応じて自由に判断できる文について照応関係が成り立つと判断した場合、照応関係の成立に関係すると思われる点があるかどうか、あるとすればどのようなものであるかを探ってきた。単一の文を対象にしたとはいえ、これらの文は現実の文脈の中で用いることが可能であるという前提のもとに取り上げられているものであるから、特にこの問題を語用論的な観点から検討する場合は、対象文はその中で名詞、代名詞の同一指示を成り立たせるような文脈の中から取り出された単一の文であるということが前提である。そのような前提のもとに単一の文を構成している諸要素を手掛かりにして同一指示を成り立た

せる条件をさぐった訳である。本稿では、文中の topicality を持っていると思われる名詞に着目した。名詞に topicality があるかどうかということもその名詞の文脈の中での使用のされかたに関係するであろう。そして、このように判断される名詞は概して文中の theme の部分にあり後方の代名詞と同一指示になるように筆者には受け取れた。theme や rheme は本質的には文脈の中での情報の伝達の仕方と関係して考えられる要素であるから、文脈を離れた単一の文だけからどの部分が theme であるかを判断することは難しいこともある。しかし、名詞と代名詞が同一指示であるように解釈するには名詞が topicality をもち、そして、そのような名詞は概して theme 部分の構成要素となりがちであると判断すると都合が良いように思われた。theme や rheme には、主部や文の前の位置に立つ要素になるのが普通であるが必ずしもそうとばかりは言い切れない。主部が rheme と考えられる場合もある。そして、そこに topicality をもった名詞があり後方の theme の中の代名詞と同一指示が成り立っている例もあった。rheme である述部の中に名詞がありその名詞が特別な意味を担うとき theme である主部の中の代名詞と同一指示となる例もあった。このように、名詞が theme の中にあるか rheme の中にあるかということだけで簡単に名詞と代名詞の同一指示の有無を決めてしまうことはできない。また、Ⅲ・4 でみたように主として意味によると考えられるような場合もあった。本稿では、C 統御が成り立たない例だけを対象にしたが、ここで取りあげたような語用論的な観点から、C 統御が成り立つとされる例を検討してみることも必要であろう。構成要素間の統語的支配関係と語用論的観点からの基準の両方からみた場合、名詞と代名詞の照応関係はどのような様相を呈するであろうか。

## 註

- 1) 用例は数例を除いてすべて参考にした書物の中で用いられているものを借用した。従って、同一指示の可能、不可能の判断もそれらの書物の著者による。尚、\*を付した文はNP's 間に同一指示が成り立たないことを示すためのもので、非文法的であることを示すためのものではない。一人称、二人称の代名詞はここでの対象ではない。
- 2) 統率者 (governor) を含めて $\alpha$  を最も直接に支配するS またはNP を $\alpha$  の最小統率範ちゅうという。
- (1) Felix expects that [S he will be elected].
- (2) I like [NP the soldiers' pictures of them(selves)].
- (1)では、従属節の主語heは統率者に統率され、VPを含む最小のSまたはNPは角括弧のSであるから、このSが最小統率範ちゅうである。(2)ではthem(selves)は統率者ofを含む最小のSまたはNPは角括弧のNPであるから、このNPが最小統率範ちゅうである。v. Leinhart (1983), p.139
- 3) 普通、文脈内で旧情報を担う部分がtheme, その旧情報を土台として新情報を付け加える部分がrhemeと呼ばれる。theme, rhemeは文法上の主部、述部と重なることが多いが、文法上の単位ではなく情報の伝達の上で考えられるもので、必ずしも主部、述部と重なるものではない。themeのことをtopicと呼ぶこともあるが、ここでは、topicとかtopicalityのある名詞というときは、themeとは違った意味で用いた。特に、相手の注意をその語に引き付ける効果を発揮するために用いられた名詞をtopicとかtopicalityのある名詞を呼んだ。次の例を見られたい。
- (1) Israel's Foreign Minister, Simon Peres, who is also head of the Labor Party, threatened last week to try to break up the country's 31-month-old government over the issue of a proposed international peace conference on the Middle East. (The New York Times, Weekly Review, May 10, '87)

(2) Women in particular seem to seek Telly out, although there are some who consider him the most unlikely international sex symbol since Henry Kissinger. Certainly he doesn't look like the conventional concept of a sex symbol: his nose seems to have been acquainted with one too many fists, his ears stand out from his head like the open doors of a taxicab, and his body—underneath the carefully tailored clothes and the expensive jewelry—is unmistakably half a century old. But Telly's beauty may be more than skindeep. (Newsweek, August 16, '76, p.39)

(1)では新聞記事の冒頭の部分に Simon Peres が導入されているが、修飾要素による十分な特定化も預かってこの人物が topic であることが読者には明瞭に理解できる。冒頭であるから先行する文脈はなく、その点では旧情報ではないが修飾によって十分特定化されることによって読者には既知情報のように受け取れるようになるであろう。つまり、theme にかわるであろう。(2)は Telly Salavas についての雑誌記事の中ほどから採った文で、すでに Telly という名前は導入済みである。代名詞を用いても、十分誰のことを指しているかわかる文脈にありながらも、敢えて名詞を用いることによって読者の注意をこの人物に強く引きつけている。筆者はこのような名詞を指して topic とか topicality を持った名詞と呼んだ。

- 4) q.v. Bolinger (1979) pp. 293—294
- 5) v. Reinhart (1983) p.57 note 9
- 6) Sloppy Identity Interpretation の可能な e では代名詞は束縛変項と解釈されるが、f ではそのように解釈できない。

(39) e Felix ( $\lambda x$  (x's mother thinks x's a genius)) and Siegfried  
 ( $\lambda x$  (x's mother thinks x's a genius)).

Sloppy Identity Reading

f The friends of Felix ( $\lambda x$  (x respect him)).

Non Sloppy Identity Reading

REFERENCES

- Bolinger, D. (1979) "Pronouns in Discourse," in *Syntax and Semantics* Vol.12, ed. Tamly Givon, 289 - 309, Academic Press, New York
- Carden, G. (1982) "Backwards Anaphora in Discourse Context," *Journal of Linguistics* 18, 361 - 387
- Davidson, A. (1984) "Synatctic Markedness and the Definition of Sentence Topic," *Language* Vol.60, No.4
- Evans, D. (1980) "Pronouns" *Linguistic Inquiry* Vol.11, No.2 337-362
- Lakoff, G. (1968) "Pronouns and Reference," in *Syntax and Semantics* Vol.7, ed. James D. McCawley, 275 - 335, Academic Press, New York
- MacLeod, N. (1985) "Some Further Observations on Pronominalization in English," *English Studies* Vol.66, No.3, 258-271
- Quirk, R. et.al. (1985) "A Comprehensive Grammar of the English Language," Longman
- Reinhart, T. (1981) "Definite NP Anaphora and C-command Domains," *Linguistic Inquiry* Vol.12, No.4, 605 - 635
- Reinhart, T. (1983) *Anaphora and Semantic Interpretation*, Croom Helm, London
- Sorensen, K, (1981) "Some Observations on Pronominalization," *English Studies* Vol. 62, No. 2, 146-155
- 毛利 可信 (1980) 英語の語用論 大修館書店
- 村田勇三郎 (1982) 機能英文法 大修館書店